

表 サクラソウ群落と出現する植物の状況

樋ノ詰 (2000.5.4調査)

調査区①

出現植物	被度 (%)	高さ (cm)	
サクラソウ	31	22	開花期
カササゲ	19	43	開花期
チョウジソウ	17	46	開花期
ヨシ	13	100	
カモジグサ	13	38	
ヘビイチゴ	12	8	開花期
ナガボノシロワレモコウ	9	36	
オランダミミナグサ	6	29	開花期
アキノノゲシ	3	23	
スイバ	2	71	開花期
ツボスミレ	2	16	開花期
ハナムグラ	1	28	
ノニガナ	1	26	開花期
ミソイチゴツナギ	1	25	開花期
ヤブジラミ	1	23	
タチヌフグリ	1	20	開花期
イシミカワ	1	14	
タネツケバナ	+	14	開花期

調査区②

出現植物	被度 (%)	高さ (cm)	
オギ	44	76	
ツボスミレ	28	19	開花期
サクラソウ	22	16	開花期
ヤエムグラ	4	19	
ヨシ	3	88	
ツルクメモドキ	4	25	
ヘビイチゴ	2	4	開花期
ハルジョオン	1	30	
ウシハコベ	1	24	
イシミカワ	1	22	
カナムグラ	1	15	
シロネ	1	12	
ヒメジョオン	1	6	
コハコベ	1	10	
ジロポウエンゴサク	1	10	開花期
コオニタビラコ	1	10	
ヒナタイノコズチ	1	9	
ツユクサ	+	5	

備考：調査面積は1㎡の区画です。被度は出現した植物が調査した区画の中に占める割合を%で示したものです。「+」はその割合が1%未満の場合です。

文献から見たサクラソウの花見の実態と自生地絶滅の一要因

毎年4月、心地よい春風の中、さいたま市のさくら草公園では「さくら草まつり」が行われ、公園に隣接する田島ヶ原のサクラソウ自生地には、擬木とロープで整然と区画された指定地の中、可憐なサクラソウの花を羨しむ多くの市民の姿がある。

さて、このような整然と区画された場所でのサクラソウの花見は、決してはるか昔から行われていたわけではない。むしろ、それが始まったのはつい最近のことである。では、昔のサクラソウの花見とは一体どのようなものだったのであろうか。文献を追って検討したい。

よく知られた資料であるが、古くは江戸時代後期の『江戸名所花暦』に尾久の原のサクラソウの花見の様子が挿図として描かれている。荒川の川辺で、花魁らしき人物が幫閹や供のもの数人を引き連れ、地面に毛氈を敷き、持参した弁当や酒を広げ、傍らでは、3人の女性が得意げにサクラソウを摘んでいるという構図である(6頁カラー写真)。そして、サクラソウの花見の土産として、荒川の白魚をすくい取って、サクラソウに添えて持

ち帰ることが行われていたことを同書は続けて記している。かつては、荒川沿いに尾久ヶ原、野新田、浮間、戸田ヶ原などの多くのサクラソウ自生地があり、どこの自生地でもこのような光景が繰り広げられたことであろう。

下って明治から大正時代、この時代も同様なサクラソウの花見が行われていたことが、夏目漱石『虞美人草』や田山花袋『東京近郊 一日の行楽』などで明らかである。その一文を引用してみよう。



「もう花見は散ってしまったじゃありませんか。今時分御花見だなんて」

「いえ、上野や向島は駄目だが荒川は今が盛だよ。荒川から萱野へ行って桜草を取って王子へ廻って汽車で帰ってくる」

「いつ」と糸子は縫う手をやめて、針を頭へ刺す。

(『虞美人草』)

「浮間ヶ原は桜草の名所だ。(略) 川を渡ると、浮間

ケ原である。一面、桜草で、丁度毛氈でも敷いたようである。頗る見事である。で、日曜、土曜などには、東京から女学生達が沢山にやって来る。女学校で、運動会に生徒をつれて来たりするので、桜草は採られ、束にされ、弄ばされて、娘達の美しい無邪気な心を飾る。」

(『東京近郊 一日の行楽』)

という具合である。実際、当時撮影された写真を見ても、自生地の中真ん中に掛け茶屋を設け、遊覧者は自生地の中で花見をしている(写真①及び「北区史」掲載写真「桜草の名所浮間ヶ原」「桜草開花期の遊覧者と掛け茶屋」)。これがかつてのサクラソウの花見の実態であり、それは花摘み以外の何者でもなかったことがわかる。サクラは愛でる対象であったが、サクラソウは決して見るものではなく、摘んで持ち帰るものだったのである。

このような光景はなにも限られた場所のことではなく、どこの自生地でも一般的に見られる光景だったことは、佐藤良徳氏が野新田桜草の会のホームページで作成した「桜草絶滅の原因」というコンテンツで引用している数多くの文献を見れば明らかである。4点ばかり引用してみる。

「東京名所の一つに数えられている浮間ヶ原の桜草保護については、(略)今年(略)は制札を立てて、根から掘り出すのを禁じた。しかし摘むのは禁じていないから、心なき遊覧者がむしるはむしるは。先を争って両手に束を作る」
(『東京朝日新聞』大正7年4月16日)

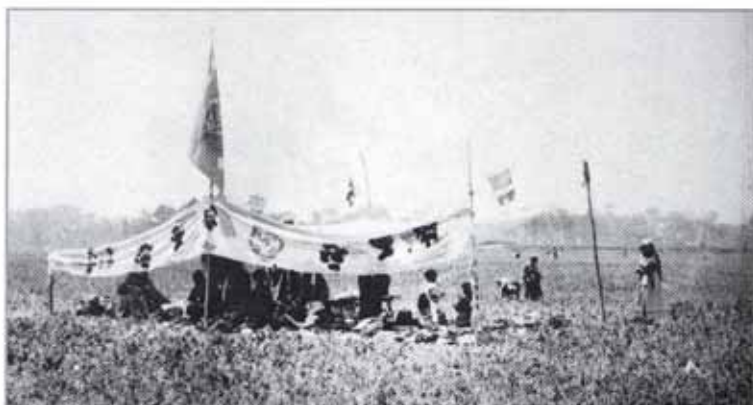
「戸田の原にてもまた桜草の基だ少なくなりしはみだりに採る者の増加せるゆえにして、榎木屋などの採り去るほかに、一般遊覧人ごとに学校生徒の夥しく採るによるなり」
(三好学『桜草原野の保存の必要』)

「わずかに残った桜草を、まだやっと蕾を出したばかりのを土地の子供が取っていた。「取っていいの。」と行ってやったら、「今日はおまわりがこない日だ。桜草が欲しけりゃおれんちへアラー。売ってやろうか。」と云っていた」

(永溪早陽『最新実査 東京から』大正10年)

「江戸二近キ浮間ヶ原、戸田原等ノ荒川沿岸ノ原野ハ(略)土地ノ変化、遊覧者ノ濫採、商売人ノ過度ノ採集等ノ為メニ今日ニテハ同地方ノ桜草ハ殆ンド採り尽サルルニ至レリ」

(三好学『史蹟名勝天然記念物調査報告第12号』「桜草ノ自生地ニ関スルモノ」大正9年)



写真① 浮間ヶ原でのサクラソウの花見の様子
(大正初期、東京都北区・梶原利夫氏所蔵絵ハガキより)

ここまで記せば、かつてサクラソウの自生地でのどのようなことが行われていたかは明白である。花が咲く時期になると、花見だ、遠足だ、運動会だと称して人々は大勢そこに押しかけ、あたかもレンゲを摘むが如くサクラソウの花を摘んで家に持ち帰っていたのである。そしてその結果、サクラソウは次第に絶滅していったのである。先に引用した理学博士 三好学の『桜草原野の保存の必要』は続けて、このように記している。

「予はかつてある新聞に某学校にて桜草採集のため遠足を催すにつき、生徒各自根掘りの鋤へらの如きものを携うべき言い渡せる由を記せるを見たり。もし事実なりとせば、この如きは天然記念物の絶滅を奨励するものにして、不注意の至りというべし。」

この鋤は特殊なもので、深く張ったサクラソウの根を掘り出すために、特別に作られたものだったが、昔はサクラソウの売買を生業としていた家を始めとして、多くの家にあつたものだという(写真②)。

このように、サクラソウが摘む対象であったことが、荒川下流のサクラソウを絶滅させたことは十分に考えられる。しかし絶滅の原因は単にそれだけではなく、いろいろな要素が加わって、絶滅したと見るべきであろう。つまり、浮間ヶ原は河川改修による氾濫の減少による土



写真② サクラソウ掘りに使用された鋤
(東京都足立区・大久保幸治氏 所蔵)

地の乾燥化、舟渡地区（板橋区）は関東大震災後の家屋復興のための荒木田土の採取、さらには戦中・戦後の食糧増産のための開墾による土地の変化などというように。濫獲と個々の地域の土地の事情の相乗効果によって、荒川下流域のサクラソウは絶滅したとみたい。

それではなぜ、田島ケ原のサクラソウは生き延びたのであろうか。ここでまた、田山花袋の『東京近郊 一日の行楽』から一節を引用してみたい。

「戸田橋をわたって、その向こうにある戸田ケ原にも、やはり、沢山桜草がある。ここまでは都の人は滅多に出かけて行かないけれども（以下略）」

とある。結果としては、都の人々が大勢押しかけて、むしり取って、戸田のサクラソウも絶滅の道をたどるのであるが、距離の問題で、戸田にはあまり都の人が行かなかったというのである。戸田でそうならば、さらに上流の田島ケ原では尚更であったろう。東京から離れていたがためにあまり人目に付かず、人の往来が少なかったのが幸いしたのかも知れない。



「江戸名所花暦」に描かれたサクラソウの花見
(東京都荒川区・松崎啓三郎氏 摺)

そんな田島ケ原ではあったが、ここも次第に人に知られることとなる。三好学は「次第二世ニ知ラレ遊覧者多キヲ加ヘ、随テ桜草ノ採去ラルルモノ夥シクナレリ。故ニ速ニ同原野ヲ天然記念物トシテ指定」するよう求めている（前出「桜草ノ自生地ニ関スルモノ」）。これは、荒川下流域のサクラソウの絶滅という教訓に学んだ三好学の先手であった。そんなことが、今に田島ケ原が生き残った要因の一つとなっているのであろう。言い換えれば、田島ケ原の今は、荒川下流域のサクラソウの犠牲の上になりたっているのかも知れない。

(さいたま市立浦和博物館 学芸員 野尻 靖)

サクラソウあれこれ

サクラソウは遺伝的な変異の多い植物として知られています。本誌10号（平成12年3月20日発行）でも、「花形調査について」として花弁の形状や色の異なる花冠の写真を紹介しました。ここでは平成14年の開花期に田島ケ原で撮影した変り種の株を紹介します。



花冠が6弁のサクラソウ



花冠が4弁のサクラソウ